

健康づくり 生きがいづくり 友だちづくり まちづくり

友の会だより

中野共立友の会・広報委員会発行
〒164-0001 中野区中野5-45-4

Eメール: a_nozawa@kenyu-kai.or.jp
Tel: 03-3386-9139

くらしに役立つなんでも相談

健康の悩み、生活・家庭の心配ごと、誰に相談したらいいか、どこに相談したらいいか、なんでも気軽にご相談ください。



友の会コーナーへ

映画「黒い雨」上映会

7月26日(土) 共立診療所の4階で映画「黒い雨」の上映会が開催され、炎天下、40人の方が来場しました。この日はポツダム宣言の日であり、即受諾していれば起きなかつたであろう原爆の恐怖と悲劇を強く印象付けられた映画でした。

原作：井伏鱒二
監督：今村昌平
主演：田中好子



(い)

日本国憲法第九条は世界人類の歴史が生み出したと言えないだろうか

戦後六十二年になるのに「戦後」という言葉が使われている。一時「もう戦後ではない・・・」と言われたことがあった。でも「戦後」という言葉は生き続けている。日本だけではなく、海外からの新聞記事にも「戦後」がある。

先の世界大戦では アジアやヨーロッパで無惨な殺し合いの末に数千萬の尊い命が奪われた。その上、一瞬にして数十萬人を殺戮する原子爆弾を造って、広島と長崎に投下した。人類絶滅の罪業だ。

一九四五年の戦争終結を大きな区切りとして「戦後」という言葉には戦争をしてはならないという人類の深い反省と決意が籠められているのでは。

「憲法と歩む」 八月十五日に想う

戦後という言葉



平和ウォーク

7/22 玉川上水散策に臨む

西武立川―鷹の台 約7km

武蔵野の自然と江戸を守る玉川兄弟の歴史的快挙、玉川上水。紫陽花の盛りに会う、時は少しスリップして気持が和む。兩岸の大樹は水の浄化に働き、緑のアーチに包まれる流れは、速やかに、深く静かに、時には浅く。木漏れ日の微笑みかける緑に浴し、心地よい足湯にも招かれて・・・。(水島 道雄さん 66歳)



平和バザー 7/29

連日暑い日が続く中、事務所がバザー品で溢れるほど多くの方から提供いただきました。当日は、豚汁すいとん、果物、産直野菜、手作りパン、北海道物産等も販売。売り手も買い手も楽しみながら、ほぼ完売。おかげ様で原水禁世界大会代表派遣と在宅患者旅行の費用に71,697円カンパできました。みなさまのご協力ありがとうございました。



お知らせ

音楽と平和のつどい

8月9日(土) 14時～ 中野共立診療所於 参加費：200円

フレバル楽団による南米音楽とお茶会

紙芝居・朗読・原水爆禁止世界大会報告等



故郷を失った日

清水 吉美さん(80歳)

軍は守ってはくれない

1945年8月、ソ連が参戦し、満州に侵攻すると敗色はいつそう濃くなりました。関東軍上層部は自分たちの家族を帰国させるため、トラック等すべてをさえ、いちちはやく避難し、市民はなすすべもなく恐怖におののいていました。わかつたことは「軍は我々を守ってはくれない」

1945年8月、ソ連が参戦し、満州に侵攻すると敗色はいつそう濃くなりました。関東軍上層部は自分たちの家族を帰国させるため、トラック等すべてをさえ、いちちはやく避難し、市民はなすすべもなく恐怖におののいていました。わかつたことは「軍は我々を守ってはくれない」

一夜明け、8月15日、目覚めると昨日の一等車はもう消えていました。誰言うともなく、「日本は敗けたらしい」と。その日、炎天下ふたたび、ジャリ満載の貨車に乗り、さらに南へ向かう貨車に乗り継ぎ熊岳城に止まりました。そこから三里程歩き、温泉ホテルと陸軍病院を目にした時には喚声を上げ抱き合いました。武装解除した兵隊さんたちが、ここで保養しており、しばし敗戦を忘れさせてくれました。その安らぎもつかの間、ソ連から病院の退去命令が出され、傷病兵さ

その後、八路軍の支配になり、私たちが一家に一台の荷馬車に載せられ、30台の馬車を連ね八路軍に付き添われ、峠を三つ越えて夜11時ころ奥深い集落に移されました。ここでは、めずらしそうに私たち日本人を見ていた村の人たちも、なれどくると会話もできるようになり、親切にしてくれました。この集落では国境を

超えた温かい人間味のある交流ができ、この思いがけない安らぎの半年間は貴重な宝物のように今も思い出されます。 次の世代に語り残したい

1946年、きびしい残暑のころ、待ちに待った帰国許可の朗報が届きました。私たちは涙を流し別れを惜しみました。奉天に集まり10月に引揚げ船に乗り、佐世保の土を踏むことができました。和装の娘さんを目にしたとき、「母国に帰ってきた」との実感で涙がにじみました。あれから60余年、声を大にして戦争の悲惨さを次の世代に語り残さなくてはと切に思います。

というものでした。8月13日、私たちは30人程の集団になり、リュック一つで生まれ育った新京(長春)市の家を捨てました。駅前広場には、いつ乗れるかわからない列車の順番待ちの人が、雨に濡れてひしめいていました。やっと乗れた無蓋車はジャリ運搬車で立錐の余地もなく、一日一晩雨にうちまら、大石橋駅に止まりました。そこで目にしたものは、一等客車で窓を開け足をのびし、涼をとっている軍部家族の姿でした。悔しさで声も出ませんでした。

乗りに乗る 乗り継ぎ

一、夜明け、8月15日、目覚めると昨日の一等車はもう消えていました。誰言うともなく、「日本は敗けたらしい」と。その日、炎天下ふたたび、ジャリ満載の貨車に乗り、さらに南へ向かう貨車に乗り継ぎ熊岳城に止まりました。そこから三里程歩き、温泉ホテルと陸軍病院を目にした時には喚声を上げ抱き合いました。武装解除した兵隊さんたちが、ここで保養しており、しばし敗戦を忘れさせてくれました。その安らぎもつかの間、ソ連から病院の退去命令が出され、傷病兵さ

国境を超えた 温かい交流

その後、八路軍の支配になり、私たちが一家に一台の荷馬車に載せられ、30台の馬車を連ね八路軍に付き添われ、峠を三つ越えて夜11時ころ奥深い集落に移されました。ここでは、めずらしそうに私たち日本人を見ていた村の人たちも、なれどくると会話もできるようになり、親切にしてくれました。この集落では国境を

超えた温かい人間味のある交流ができ、この思いがけない安らぎの半年間は貴重な宝物のように今も思い出されます。 次の世代に語り残したい

1946年、きびしい残暑のころ、待ちに待った帰国許可の朗報が届きました。私たちは涙を流し別れを惜しみました。奉天に集まり10月に引揚げ船に乗り、佐世保の土を踏むことができました。和装の娘さんを目にしたとき、「母国に帰ってきた」との実感で涙がにじみました。あれから60余年、声を大にして戦争の悲惨さを次の世代に語り残さなくてはと切に思います。

喜んでもらって嬉しい ボランティア活動

今日はよく眠れそう



上：宮下寛さんは3階病棟に週2,3回食事の配膳・お話相手・買物等で来院しています。「ボランティアは楽しい。若い人にもこういう別の世界がある事を知ってほしい」



中：3階病棟の月1回のお茶会は毎回フラダンス、手話コーラス、朗読、紙芝居、手品等披露しています。単調になりがちな毎日に彩りをそえ患者様に変喜ばれています。



右：通所リハビリで江戸芸かっぱれを披露する山田ヨシ江さん(81歳)。ご自身もリハビリ治療中ですが、「みなさんの表情が明るくなってるので嬉しい」



遠慮なく声をかけて下さい

職場紹介

共立診療所看護部
看護師長 佐々木 由紀子

共立診療所の看護部は12人(パートを含む)のスタッフがいます。外来診療の他に、在宅医療科、共立病院での内視鏡検査、CT造影検査、シャント手術など

を担当しています。外来には、慢性疾患で定期的に受診される方や急に具合が悪くなつた方、健康診断など、様々な理由で来院される患者様がいます。元

心がけています。私たちの仕事は、医師の指示による注射や点滴などの医療行為、各種検査の予約と説明、患者様自身がご自分の病気を管理できるように食事や運動の指導、薬の説明やインスリン注射などの指導をする事です。病院検査担当は安全で苦痛が少なく検査を受けられるよう努力をしています。私たちは、いつも忙しく、ばたばたと走り回っている

る印象が強いでしょうが、何か困っている事があれば、遠慮なく声をかけて下さい。患者様と直接お話しする事が勉強になります。経験となっていくます。出来る限り、各職種や往診地域と連携を取り、皆様が安心して生活が出来るように考えていきたいと思ひます。



左から上藤 田村 中園 三ヶ田、赤澤のみなさん

間、医師と患者様の間に立ち、訴えをよく聞いて、より良い医療を受けられるように日々

左から佐々木、中尾、佐藤、桜木のみなさん



左から佐々木、中尾、佐藤、桜木のみなさん

死について

(下)

医師 長谷川 久美
(江古田沼袋診療所所長)



死を受け入れる

前回、お話ししたように「死」は瞬間ではありませぬ。ある程度、幅をもった時間ということになります。国によつては人の遺体が腐乱し始めた時点で周りの人々がその人の「死」を受け入れるというところもあるそうです。人間の全ての細胞が死ぬのは本当はもつと後になりますので、あなたが間違つてはいませぬ。

その人の死はいつなのか

もつと広く考えると、事故や殺人などの特殊な場合を除いて人間は突然死ぬことはほとんどありません。歳とともに体はどんどん衰え、い

死は徐々にやってくる。その人の死はいつなのか?意識がなくなつて生きていける人たちが、会話ができなくなつたところから言うと、極端なことを言うと、認知症が進んで意志の疎通が全くできなくなつた時点で、その人は死んでしまつてい

今を生きることは、私に「死」について考えることは「生きていくこと」だと思つています。「死」が自分のこと、あるいは近づくと思つていくことは「生きる」といふことに思ひます。自分がどんなふうになるかで、今をどう生きるべきか、あらゆる世代に考えて欲しいと、診療をしながら常々思つている今日この頃です。

暑中お見舞い申し上げます。



食事会「穂の会」 夏野菜カレー



食事会「あした」 中華風炒め物



休止していた食事会が7月8日再開しました。雑誌「いつでも元気」に載ってるレシピを参考にしました。次回8/26(火)

7月11日、手作りのルーの味に「昔懐かしい」「美味しい!」と大好評でした。次回9/12(金)



す。医学的な「死」の瞬間そのものにはあまり大きな意味はないのです。

今を生きる

